

川崎市制50周年記念誌



川崎市役所

区長あいさつ

川崎区は、昭和47(1972)年に区制が施行されてから、今年度で50周年を迎えました。かつて宿場町として賑わった東海道川崎宿の歴史や、日本有数の参拝客を誇る川崎大師平間寺、古くから日本経済をけん引する京浜工業地帯、最先端の研究開発が進むキングスカイフロント、世界との玄関口である羽田空港へつながる多摩川スカイブリッジなど、多様で魅力的な地域資源を多く有するまちになっております。

今年度は、区制50周年という節目の機会を捉え、このような魅力ある地域資源を区民の皆様にも再確認・再発見してもらい、自分たちの住む地域の歴史や現在の様子への関心を高めていただけるよう、昭和38(1963)年頃の川崎駅前のジオラマと区内の魅力ある場所やものの新旧写真の展示や周年ロゴマークをヘッドマークに掲出した京急大師線の車両運行など、地域団体や企業市民の皆様の御協力のもと、さまざまな取組を行ってまいりました。

この記念誌は、そういった区のこれまでのあゆみや魅力ある地域資源、周年事業の様子などを紹介する内容となっております。記念誌を通して、区の過去や現在を感じていただくことで、多くの区民の皆様が区に対する愛着を深めていただけると幸いです。

また、川崎区では、区制50周年に続いて、令和5(2023)年に東海道川崎宿起立400年を迎えました。さらに令和6(2024)年は市制100周年を迎えます。大きな節目の年が続きますので、引き続き、区民の皆様が自分たちの住む地域への関心を高め、愛着を深めていただけるような取組を進めてまいりたいと考えております。

未来に向けた川崎区のさらなる発展のため、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。



川崎区長 増田 宏之

目次

地域史講座

川崎区制50周年とこれからの時代へ 4

誌上座談会

川崎区の未来について 6

50周年の年に開催されたイベント 10

あの頃の川崎区 18

これまでの川崎区 24

数字で見る川崎区 26

「区の花」「区の木」の紹介 28

コロナ禍の生活 29

50周年の年に生まれたロゴマークとキャラクター ... 30



川崎区制50周年とこれからの時代へ

川崎区制が施行される前から、川崎区にさまざまなかたちで関わってこられた斎藤氏を講師に迎え、ご自身の経験を交えながら区の歴史を振り返っていただきました。本誌では、講座でお話いただいた内容の一部を紹介します。

一般社団法人川崎市観光協会 会長
公益社団法人川崎港振興協会 会長

斎藤 文夫 氏



■ 川崎市の誕生

川崎市は、来年、市制100周年になります。実は大正13(1924)年ではなく、前年の大正12(1923)年に市制を立ち上げようとしていました。しかし、関東大震災に見舞われたことと、大師河原村が町となってから合併したいということで、人口を少し増やし、大正13(1924)年に大師町となった上で合併をいたしました。小向や戸手を含めた御幸村も一緒に、人口4万8千人、神奈川県では横浜、横須賀に続く三番目の都市として誕生しました。

■ 川崎区の名称

川崎市川崎区の名称には、実は曰くがあります。当時の市議会議員が選考会場の砂子会館から我が事務所へ飛んできて「斎藤さん、“川崎区”に決めてきたよ」と鬼の首をとったように知らせに来ました。聞いた瞬間「えっ！川崎市川崎区？」と思いました。なぜなら当時は「川崎市中央区」という名称が半分以上、圧倒的な支持を得ていたからです。しかし、今考えてみると、川崎市は川崎町から始まっています。その町名を区名として残した。ただ近代的な名

前ではなく、歴史に基づいた名前を残してくれた。もし、中央区、中区、港区、南区などの名称だったら、歴史を物語ってこられなかった。川崎市川崎区こそ川崎発祥の地であり、歴史を物語っていると考えていただければと思います。

■ 川崎大師の誇るべき歴史

川崎といえば川崎大師があります。第11代将軍から第14代将軍まで、将軍が7回御成りになっています。将軍がお大師様に来るときは何百人、何千人という行列を組んで川崎宿へ来しました。そして大師で厄落としをされました。

ここで面白い話があって、第11代将軍が江戸城を出て、川崎大師へ向かわれました。前触れが来たその朝に、なんと川崎大師平間寺の第9代隆円上人が、当時まだ39歳でしたが、脳溢血で急逝されてしまいます。慌てて、近所の明長寺へ遺体を送り、さあどうしようと。将軍は既に出発されている。代わりのお坊さんが厳粛に護摩を焚き、お帰りいただいたのですが、いつこれがバレしてしまうのかビクビクしておりました。案の定、風の噂でどんど

ん漏れてしまいます。ところが、江戸市民の反応は「おい、聞いたかよ。大師の坊さんが、将軍の厄を背負って、西方浄土へ飛び立っちゃったよ。これこそ真の厄落とし。よし、みんな川崎大師へ行こう」となりました。その年はなんと百万人が川崎大師へなびいたという、嘘か本当か講談話の様です。

■ 川崎大空襲

昭和20(1945)年頃、川崎は日本の産業を担った産業都市でした。ところが、昭和20(1945)年4月15日、アメリカの爆撃機約200機が夜9時から、川崎に猛爆撃を加えました。町会長から「これ以上ここにいと焼け死ぬから逃げろ！」と言われ、父母と手を携えて逃げました。火災の中逃げるのは大変で、本能的にまず水のある多摩川の方へと逃げました。ところが京浜急行沿いの道路の所で、右から左から人がぶつかり合って持ち上がっていて進めませんでした。横から見ていて人の流れの激しさにビックリしました。次に、駅前の防空壕に行きまして、そこにずっといればよかったのですが、堀川町、東芝の方に焼夷弾がどんどん落とされ、「ここにいたら、銃撃を受けるかもしれない。ここは止そう」と新川通りを経て、昔、富士見公園の中にあった清水池に向かって煙の中を這うままに行きました。清水池に到着し、しばらくしたら、辺りが真空状態になりました。これは本当に凄かった。周りが燃えて、ぐるぐると嵐の様な渦が巻き始めました。水が水面より1m以上も上がり、気がつくとも池に引き込まれました。そういう経験をしました。熱いから濡れたのはちょうど良いなんて負け惜しみを言いながら水の中でのいでの帰りました。

見渡す限りの焼け跡で、川崎駅から南を見たら、昭和12(1937)年に建てられた市役所の時計台はほぼ無傷で残っていました。あちこち逃げ回らずに市役所に逃げればよかったと思いました。

もう一つ、宮前小学校は私の母校ですが、その鉄筋校舎はそっくり残っていました。木造の建物は全て燃えてしまった。それから、稲毛神社の斜前に煉瓦三階建ての川崎の電話局。駅から海方面を見ると、これらしか残っておりません。後は房総半島の綺麗な山並み。鋸山が見えるなんて全く予想もしない状況でした。

■ 起立400年を迎えた東海道川崎宿

元来、川崎は徳川直轄の天領でした。徳川家康が

中原街道から江戸に入り、江戸に城を構えてから、平塚まで臨海部に東海道をつくりました。その時に、江戸三大橋の一つ「六郷大橋」が架けられました。ところが、当時の多摩川(六郷川)は大変な暴れ川で、上流にダムがあるわけでもなく、ちょっと雨が降るとすぐに橋が流されてしまい、とうとう貞享5(1688)年7月の大洪水による橋の流失を機に幕府は架橋を断念しました。以来二百有余年、渡し舟の時代が続きます。

川崎宿は慶長6(1601)年の東海道の開設から遅れて、元和9(1623)年に設置された宿場であり、当初は宿泊する設備は許可されておりません。箱根を越えて小田原で一泊してから江戸に入る人は神奈川、あるいは保土ヶ谷で寛いで、衣服を改めて江戸へ入ってくる。川崎ではせいぜい昼食をとるくらいで、渡し舟に乗って江戸へ帰ってくる。行きも帰りも通過町。これは川崎の伝統的・歴史的宿命だと私は思っています。

※その後、川崎宿にも万年屋、会津屋、新田屋などの旅籠屋ができました。

■ これからの時代へ

昔は川崎というと「公害で大変そうですね」と言われました。笑い話の様ですが、当時は鼻毛の伸び方が今とは全然違いました。半月も切らないと鼻から飛び出してしまふ。人間の体とはすごいものです。

そういう時代もあった。それから思えば、川崎は誇りに思える良いまちになりました。人情豊かな川崎、特に川崎の発祥の地である川崎区が、これからも川崎の中心として、文化的にも誇り高いまちづくりに頑張してほしいです。

【プロフィール】

昭和3(1928)年神奈川県生まれ。慶應義塾大学経済学部を卒業。昭和38(1963)年に神奈川県議会議員に当選。昭和56(1981)年には神奈川県議会議員に就任する。昭和61(1986)年、参議院議員に初当選。2期努める。平成6(1994)年に川崎大師観光協会会長に就任。平成13(2001)年には川崎・砂子の里資料館を開館。当館は平成28(2016)年に休館したが、当館の作品が展示された浮世絵ギャラリーが令和元(2019)年にオープン。平成15(2003)年から川崎市観光協会会長に、平成16(2004)年から川崎港振興協会会長に就任している。



誌上座談会

川崎区の未来について

川崎区は、令和4(2022)年4月1日に区制50周年を迎えました。区内で長年ご活躍されている御三方をお招きし、これまでの歩みを振り返るとともに、川崎区の未来について展望していきます。

川崎区長 増田 宏之氏 × 川崎区文化協会 会長 中村 紀美子氏 × キングスカイフロントネットワーク協議会 会長 野村 龍太氏 × 川崎市ふれあい館 副館長 鈴木 健氏



区長 本日は川崎区制50周年記念の誌上座談会にお集まりいただきありがとうございます。進行を務めます川崎区長の増田と申します。本日の座談会では、川崎区文化協会の中村紀美子会長、キングスカイフロントネットワーク協議会の野村龍太会長、川崎市ふれあい館の鈴木健副館長をお招きして、「川崎区の未来について」をテーマに、川崎区での活動の歴史を振り返り、川崎区の未来を展望したいと思います。

川崎区は、旧東海道の宿場町、川崎大師平間寺の門前町として開けた歴史のある町ですが、工場移転が集中し、急速に都市化が進みました。公害などの問題も生じましたが、環境改善に向けた取り組みを進め、さらに臨海部の殿町地区では、国際戦略拠点「キングスカイフロント」として、先端技術の研究開発拠点の整備が進められております。また、外国人人口が市内で最も多く、多文化共生のまちとしての特性もございます。



なかむら きみこ
中村 紀美子氏
川崎区文化協会会長

第二子出産を機に教師を退職。子育てがひと段落したところで神職の資格を取得し、神職(若宮八幡宮元宮司、水神社宮司)として奉仕している。子どものころの夢は、教師。

それでは、自己紹介とこれまでの川崎区での活動についてお話をお聞かせください。

《1 川崎区でのこれまで》

■ 川崎区民となり半世紀

中村氏 川崎区で神主をしております中村です。昭和49(1974)年に川崎区に来て以来、ずっと区政推進の分野で行政の方々と関わらせていただいています。私は自分が住んでいるところが良いと思いたいので、良くするために何かできることがあればやりたいとの思いから、区のいろいろな行事などに参加して意見を言わせていただってきました。

なかでも思い出深いものとしては、「川崎区づくり白書」の策定に関わる途中で、地域を活性化するために始めた「かわさき大師サマーフェスタ」ですね。私は白書ができればそれで終わりというのは嫌でした。実際に活動していかないと意味がないと思っています。

区長 そうですね。まさに地域主体でのまちおこしを仕掛けていく動きにつながったと思います。

中村氏 人のためにやっていると思ったら疲れてしまいますよね。自分達のためだと思わないと。実際、サマーフェスタはウォークラリーを中心としたイベントで、25年続いています。

■ 川崎区民への感謝

野村氏 実験動物中央研究所の理事長の野村です。我々は宮前区の野川で40年くらいお世話になっていましたが、施設の老朽化が進む中で、平成19(2007)年頃、川崎市から殿町への移転の打診がありました。市の方も殿町をライフサイエンスの拠点にしたいとの考えがあったと思います。移転費用などの問題もありましたが、平成23(2011)年に地区第1号として運営を開始しました。快く受け入れてくださった区民の皆様には、この場を借りて感謝を申し上げます。

何もなかった土地がキングスカイフロントとしてここまで発展し、移転から10年が過ぎましたが、先ほど中村会長がおっしゃった地域主体のまちづくりをまさにやってきたつもりです。ネットワーク協議会では、顔の見える関係づくりを一番のテーマにしており、日本一仲の良いサイエンスパークになっていると思います。

■ ふれあい館の開設には苦労も

鈴木氏 ふれあい館の副館長の鈴木です。私自身は10代のころから、もう30年以上、在日外国人の支援やコミュニティづくりなどの活動に携わってきました。そして、10年前から、ふれあい館で働いています。

ふれあい館が開館して35年になります。ふれあい館を運営している社会福祉法人青丘社は50年にわたり、さまざまな人たちが共に生きる地域づくりを進めてきました。ふれあい館で仕事をするなかで、川崎区は多文化で、いろいろな人が交わりながら生活してきたことを感じます。また、川崎区は工業都市として成長を遂げた地域なんだと思います。

区長 ふれあい館の設立の時は、さまざまな議論があったようですね。

鈴木氏 ふれあい館の建設にあたっては、住民の理解を得るために苦労もあったようです。先輩方の、多様な人たちが共に生きられる地域づくりにかける思いや努力が実を結び、地域の方々から大切にいただける施設になったんだと思います。

区長 先輩方の努力があつての今があるということですね。

続いては、今後の川崎区の未来を考えたときに、どういう形にしていっていいだろうとか、どういう風になってほしいかについて、お話を伺いたいと思います。



のむらりゅうた
野村 龍太氏

キングスカイフロントネットワーク協議会会長

三井物産株式会社入社。バイオ事業の責任者を最後に平成15(2003)年年退社。財団法人実験動物中央研究所に入所。平成25(2013)年より理事長に就任。子どものころの夢は、電車の運転手。



すずき けん
鈴木 健氏

川崎市ふれあい館 副館長

外国人が多く住んでいる桜本で子ども食堂や食糧支援など多文化共生に係る取組を中心に、長年にわたり区内で活動している。子どもころの夢は、漁師。

《2 未来の川崎区のイメージ》

■ アジアの活気とともに成長していければ

鈴木氏 新しい川崎区をつくっていくというところは私たちにとっても大きなテーマだと思います。というのも川崎区はイメージが変わってきましたよね。多摩川沿いとかマンションがたくさんできてきて、新しい住民の方も増えて、昔は住みたくないまちと言われていた川崎区から、住みたいまちに変わってきました。

これからおそらく脱炭素社会に向けて、重化学工業を中心とした工業のまちから大規模なまちの転換、地域の転換というのが余儀なくされていくでしょうし、必要になってくると思います。

野村氏 今世界の流れは大きな企業から小さなベンチャーといった小さい方に移っているんです。大企業というのはもう研究開発をしてもなかなかいいものが出てこない。それよりも新しい小さなベンチャーからどんどんいいものが出てきて、それを大企業が買収して、それから製品を開発してくるということが結構増えてきています。ですから、大企業の人たちだけという時代から中小企業の人たちの考え方そういうものがどんどんこれから大きく伸びていく時代になっていくんだと思います。

鈴木氏 去年の年末から今年の新年にかけて3年ぶりにフィリピンに行って、今アジアの国ってすごく活気があるし、フィリピンは日本との格差が10倍くらいあると言われていたのが、下手するとあと数十年経つと、経済レベルで逆転が起きるとも言われています。一方で、日本は格差の拡大など、将来の見通しが明るくなくなっています。しかし、将来を悲観するだけでなく希望を持って新しいものを作っていかなければならないと思います。

これからの川崎区の姿を考えると、やはり今までの歴史であったり、その中で培われてきたものを大切にしながら、新しい川崎区の地域づくりを進めていければいいと思いますし、希望を持ちながら、そこに私たちも参画していければいいなと思っています。

■ 世界の最先端を目指して

野村氏 我々のところは本当に世界の最先端の研究機関になろうという思いがあります。世界に通用する技術の開発というのは思いっきりやっていきたいと思っています。ただし世界の最先端の尖ったものを作るだけではなんの意味もなく、それをみんなが使えなければならぬ。競争と協調というものを巧いバランスを持ってやっていくということがこれからの時代大事なのではないかと思っています。

またキングスカイフロントでは、小・中学生から大人まで、世代に応じたいろいろな教育活動を行っています。科学の好きな子どもたちを増やしていきたいですね。

そうやって区民の皆様との関係性も広げて、ともにこのまちを発展させていきたいというふうに思っておりますので、是非ともご協力いただいて、一つの川崎区の誇りとして何かと言えるようなことになっていければいいのかなと思います。

区長 ありがとうございます。市民、区民にとって自慢できる研究成果がずっと出てくるのだらうなと思っています。

鈴木氏 サイエンスの中でも、中小であったりベンチャーであったり世界を相手にはやはり多様性というところが非常に大切なんだと感じました。私としては川崎区が今後、今以上に多様性を大切にしながら新しい道に進めていければいいなと思います。

川崎区の歴史の中で培われてきた川崎区の強みというものがあるのかということのを振り返りながら、新しい川崎区を作っていくということを地域の方々と一緒に考え、考えるだけでなくさまざまなことに取り組んでいきたいなとますます思いました。

■ コミュニティの場の創出を

中村氏 私は三要素といつも言っているんですが、若者、馬鹿者、よそ者、この3つがキーワードになるのだと。若者というのは失敗が許されるんです。馬鹿者というのは、本当に利口な人は馬鹿になれるんです。それからよそ者というのは、中にいる人は良い悪いが見えないんです。でもよその人からするとあれいいじゃない、これいいじゃないというのが見えるんです。それを私たちはもっと知らない。

例えば、お寺一つにしても川崎区にはいろいろな人のお墓があります。以前、「川崎評論」にも載せたのですが、宗三寺には古賀稔彦の立派なお墓がありますし、川崎大師平間寺の北の湖のお墓には本人の手形があります。また、妙遠寺の小泉次大夫と田中休愚の二君のお墓など、いいものがいっぱいあります。いいもの、いい人、いい場所をどんどん地域の人に広げてもらうことが大事かなと思います。

また、どこでもお祭りって共通ですよ。お祭りはコミュニティの場、みんなが寄ってくる場なんです。そこに行くとみんな楽しいとか安心する、そういう場所ではないでしょうか。そういった、人々が寄り合うところも大事なので、それをみんなで考えて作り出していくこと。そういう場の提供も行政の方をお願いしたい。

野村氏 行政がやってくれることと、そこにいる我々がやるべきことと両方あると思うんですね。それを上手く助け合いながらできると良いですね。

鈴木氏 人と人との濃いつながりがやっぱり川崎の力だなと自分自身も感じています。しかし、近年、地域でも徐々に人のつながりが薄くなり、孤立・孤独が深刻化しているように感じます。まだある人の強いつながりという川崎の強みを活かしながら、新しい人と人とのつながりであったり支えあいを作っていく必要があると思います。



ますだ あつし
増田 宏之氏

川崎区長

令和3(2021)年4月から約2年間、区長として従事。子どものころの夢は、世界一周の旅。

■ 人と人のつながりがなくては

区長 ありがとうございます。

多様性といういろいろな人材がここに集まってくるという流れは今後も続くんだと思うんですね。当然、野村会長のところの研究は外国の方にもたくさん入ってもらってさらに研究レベルも上がっていくんだらうし、もっともっとまちの中にも多様な人材が入ってきて交流する時代になってくると。そんな時に、もともといる私たちとしては、これまでの歴史をしっかりと踏まえて、これまでの先輩たちの努力に感謝をして、それをよく知ったうえで、来た人たちにもそれが伝えられるようにしなきゃいけないということと、中村会長がおっしゃったように、若い人のチャレンジ精神とか、外から来た人のアイデア、意見をちゃんと受け止めて、いろいろなことにチャレンジしてこれからのまちをつくっていくことが大事ということですね。

本日の座談会では、「川崎区の未来について」をテーマに、皆様に貴重なお話をいただきました。まちがまちとして成長していくためには、人と人とのつながりがなくてははいけないと思います。

本日は、本当にありがとうございました。